

研究班番号【 51 】
高校生の死生観について
～自殺が多いのはなぜ？～

保健班:梅木 日愛、八尾 色、山田 京

Abstract

This study focused on suicide among young people in Japan, a social problem and one with which we are all familiar, and aimed to solve this problem by surveying high school students' views on life and death. In the course of the survey, we clarified actual high school students' views on life and death, and also found a relationship between self-esteem and views on life and death.

要約

本研究は、社会問題であり、また私たちの身近な問題である、日本の若年層の自殺に着目し、高校生の死生観を調査することで、この問題の解決をめざした。調査の中で、実際の高校生の死生観を明らかにし、また、自己肯定感と死生観の関係性を見出した。

1. はじめに

「余命十年」など、死をテーマとした映画が若い世代の間で流行ったことから、若い世代の人々は死に興味や関心があるのではないかと考えた。また、日本では15歳～34歳の死因の第1位は自殺であることが報告されている。そこで、高校生はどのような死生観を持ち、死についてどのように考えているのか調べ、自殺で亡くなる若い世代の人たちが少しでも減少する方法を模索した。

2. 研究手法

高津高校76期生、77期生に対しGoogleformを用いてアンケートを2回に分けて実施した。

《実験1》

1回目のアンケートの内容

- ①死生観の有無。
- ②日本の自殺に関する現状を把握しているか。
- ③自己肯定感について。
- ④死別の経験の有無。

大きくこの4つの観点に分け、調査する。

《実験2》

2回目のアンケートの内容

自己肯定感と死生観の関係性に着目した。

①自尊感情尺度(ローゼンバーグ)を用いて自己肯定感を測定する。40点満点の尺度とし、30点以上の得点で自己肯定感が高い、20点以下の得点で自己肯定感が低いと区別する。

②死生観を測るために様々な尺度から選別した項目を用いて死生観を測定する。

I 死にたいと思ったことがあるか 8点満点

II 死を怖い、恐ろしいと思うか 8点満点

III 死への親和性について 12点満点

これらの、3つの観点に分け、それぞれ点数化する。

①の自尊感情尺度の点数と、②の各観点ごとの点数の平均を比較することで、自己肯定感と死生観の相関関係を調査する。

3. 結果

《実験1》

1回目のアンケート結果

①死生観の有無

- ・自分自身の死について考えたことがある
- ・大切な人の死について考えたことがある

②日本の自殺に関する現状を把握しているか

③自己肯定感について

④死別経験の有無

《実験2》

2回目のアンケート結果

①自尊感情尺度の平均点 25.0点

② I 死にたいと思ったことがあるか(8点満点) 平均点 3.6点

II 死を怖い、恐ろしいと思うか(8点満点) 平均点 5.9点

III 死への親和性について(12点満点) 平均点 7.6点

4. 考察

実験結果より、高校生の段階で死生観の形成がなされていることがわかった。また、死への親和性が高まっている現在でも、死を怖いものであったり恐ろしいものというイメージを抱いていることは変わらないことから、一概に自殺率が高くなった原因はこれだ、と断定することは難しいと考えられる。

5. 結論

死生観が形成されている高校生の多くは、死を怖い、恐ろしいものだと思っており、それは自己肯定感の高低に関係なく抱く感情である。また、日本の若年層の自殺率が高いことを認知している人はとても多く、このことを深刻な問題であり、解決すべきと考える人が多くを占めた。

6. 参考文献ならびに参考Webページ

死生観に関する研究～死生観尺度の構成と信頼性 妥当性の検証～(2014,平井)